

私は一昨年だったか、羽生善治・森内俊之の名人戦（王位戦ではないが）のとき、朝日新聞社の仕事で対局中の部屋に入らせてもらい、歌を作ったことがあったので、緊迫した空気がよく分かる。

驟雨来て白萩こぼるる百花園はるかなる母の散葉の  
いろ 児島昌恵

美しい上句、そして下句への意外な展開。上句がやや古風な分だけ意外性にインパクトがある。「散葉」という、今ではほとんどつかわれなくなった語が、逆に新鮮に響く。

虎骨酒のならば廊下の待ち時間いまだアジアに馴染まぬ我が  
服部崇

仕事でたずねたラオスでの一連中の作。「虎骨酒」という珍しい薬用酒がなぜ並んでいるのか分からないが、一首は、全くなじみのない、いわば異界に来た思いにさそわれたの感じだろう。「虎骨酒」は「ここつしゅ」と読み、焼いた虎の骨をひたした酒で、ひどく高価な薬用酒らしい。そんな虎骨酒の瓶が並んでいるのはいったいどこなのだろう。

点描の光散らばる森のまへ溶けんばかりに人立ちつくす  
木場陽子

展覧会場で印象派の絵の前に長い時間立ちどまって絵を見ている人物をうたっているようだ。一首は、絵の前に立つ人物を、あたかも絵の中にいる人物のようにうたっているところが見どころである。

僕の名をしばし忘れる母にしておほよそは大丈夫な

この世

高山邦男

認知症気味の母上と自身の関係を、親子としてのプライベートな関係ではなく、「この世」という広い場に出すことで状況が一挙に変化することをさり気なくうたって説得力がある。親子だけの問題としてみれば一大事だが、「この世」という広い世界を視野に入れば、おおよその「大丈夫」が見えてくる。一方で、読者は、作者のつらいだろう現実を読むだろう。

ひっそりと茸生みつき黙す山 熊除け苦魔除け鈴鳴らしゆく  
鈴木香代子

茸がたくさんある山に、茸狩りにゆく場面だろう。松茸もあるのかもしれない。山を擬人化した上句、とてもいい。「黙す」にリアリティがある。

解答の根拠を訊けば「勘」という生徒に丸をしぶりつつ遣る  
塩野ゆり子

とにかく正解なので○をつけたというのである。「しぶりつつ遣る」がなんとも可笑しい。作者は中学か高校の教員だろう。

反る撥ねる若き力をみせている書物のノドの押さえ難しも  
中西由起子

単行本のノド（とじ目の部分）が堅くて、本が開きにくい、そんな場面をクローズアップした一首。擬人法を採用して「若き力」にリアリティをもたせているところに特色を見る。私は出版社にとめていたことがあるから分かるのだが、このように開きにくい本は、本として出来の悪い本なのである。